

秋山洋子 駿河台大学における留学生教育
—異文化交流と人材育成の視点から—

私は1995年から17年にわたって、留学生の日本語教育にたずさわってきた。退職に当たって、これまでの経験を論文にまとめたいと考え、その準備段階として、教養文化研究所と経済研究所合同で発表の場を設けていただいた。論文は『駿河台大学経済論集』第21巻第2号（3月発行）に掲載したので、参照していただきたい。

下の図は、「留学生10万人計画」が提唱された1983年から現在までの在日外国人留学生総数と、駿河台大学の留学生数とを同一のグラフ上に重ねたものである。これを見ると、この間日本の留学生数は大幅に増加したが、その伸びは必ずしも順調ではなく急上昇と停滞を繰り返し、本学留学生もそれに連動して増減している。ここから読み取れるのは、日本の留学生政策が確固とした方針を持たず、政治・経済状況に応じて揺れ動き、その揺れにしたがって留学生数が増減してきたこと、大学もまたその大きな流れに乗せられてきたということだ。

その中で、本学に在学した留学生の大部分は、勉学とアルバイトの両立に苦労しながら意欲的に学び、指導・支援にあたる教職員も献身的にその任にあたってきた。ただ、大学として留学生の存在をきちんと位置づけて大学活性化に生かしてきたかということ、必ずしも十分とはいえない。今後さらに、入試の方法なども含めて、優秀な留学生を確保し教育する具体的方針を打ちだしてほしいと願っている。

